

シンポジウムの概要

シンポジウムコーディネーター 玉置泰司

1. テーマ

「定置網漁業の今日的評価」

2. シンポジウムの趣旨

定置網は我々にとって最も身近で営まれている漁業であるにもかかわらず、これまで本学会でシンポジウムテーマとして取り上げられたことはなかった。本学会シンポジウムが東日本で開催されるのは、2002年の第44回金沢大会以来となるが、定置網は東日本各地においても重要な漁業であり、シンポジウムテーマとしてスポットライトを当てるのはふさわしいものと考えた。本シンポジウムでは定置網のうち、定置漁業権に基づいて営まれている大型定置網・さけ定置網(以下定置網漁業)を主眼にして取り扱うこととする。

沿岸漁業の漁獲量に占める定置網漁業の比率は、省人省力化機器の導入が積極的に始まろうとした1968年が5.7%と、沿岸漁業の生産統計が1956年に取られてから最も低かったが、その後増加し、直近の2015年には33.1%でこれまでで最高の比率となった。漁業生産額で見ても、沿岸漁業生産額に占める定置網漁業の比率は、1968年には9.4%と1956年以降最も低かったが、その後はおおむね増加傾向にあり、2006年には21.5%に上昇した(漁業種類別生産額統計は2007年以降公表されていない)。

沿岸漁業の中で、定置網漁業の位置付けが増大しているのは、漁獲量・漁業生産額だけではない。定置網漁業の中で比較的規模が大きな経営体は、1990年代半ば以降、Iターンを含めた若者の就業が増加しており、沿岸漁業の中で存在感を強めている。

戦後の漁業制度改革による漁村民主化の中で、定置網漁業の全村的経営である「村張り組織」が多く設立された。この村張り組織はその後漁協自営、会社組織などに転換したところも含めて、現在の定置漁村における活性化に大きく貢献している。定置漁村においては、1980年代頃から村張り組織による観光定置や中学生の漁村宿泊が知られるようになり、1990年代から漁協経営による直販所やレストランの設立が増加するようになった。また、六次産業化法が施行された2010年頃から私的会社組織による水産加工、レストランなどの経営がみられるようになった。

本シンポジウムでは、定置網漁業が漁村活性化にどのように貢献しているのか、多角的な面から改めて評価を行い、今後の展望を探ることとしたい。

3. 構成(報告タイトルは仮題)

司会：玉置泰司(中央水産研究所)、大谷誠(水産大学校)

第1報告：定置網漁業就業者の動向：松浦勉(中央水産研究所)

第2報告：さけ定置網を中心とした生産・加工・輸出の動向：清水幾太郎(北海道区水産研究所)

第3報告：もうかる漁業の改革計画による定置網漁業の将来像：奈田兼一(特定非営利活動法人 水産業・漁村活性化推進機構)

第4報告：定置網漁業の経営形態と漁村活性化への貢献：馬場治(東京海洋大学)

第5報告：定置網漁業による六次産業化と新しい経営方向：酒井秀信((株)鹿渡島定置)

コメンテーター

- (1) 森義信 (一般社団法人 日本定置漁業協会)
- (2) 林紀代美 (金沢大学)
- (3) 婁小波 (東京海洋大学)

4. タイムスケジュール

10月29日(日) 9:00~14:30

9:20~11:50 報告者報告

11:50~12:30 昼休み

12:30~13:00 コメンテーターコメント

13:10~14:30 総合討論